

日本初の認定  
**ジラス**  
世界農業遺産  
①

# 未来へつなげていく農業遺産 ジラスとともに佐渡を活かす

ジラスは正式名称を「世界重要農業遺産システム」といいます。ユネスコの「世界遺産」が遺跡や自然を対象としているのに対し、ジラスは農業活動や生物多様性を重視し、次世代へ継承すべき伝統農業や文化の保全を目的としています。佐渡の人たちが何世代にもわたり続けてきた農業の営みや新しく取り組んでいる「生きものを育む農法」、そして農業によってもたらされた美しい景観・文化が世界に認められました。ジラスは過去の「遺産」ではなく、未来につなげていくものなのです。

後、農業振興はもちろん、子どもたちの環境学習、交流人口の拡大や観光振興などのきっかけとしても期待できます。そこで、ジラスを市民の皆さんから知っていただき、佐渡の未来にどう生かしていくかをともに考えていただくため、今月号からシリーズで掲載します。

## 佐渡の農業

佐渡の農業は、水稻を主体とした経営形態です。地域性を生かし、国中平野では稲作、南佐渡では柿などの果樹、その他の海岸段丘では稲作と肉用牛や沿岸漁業による経営が営まれています。

トキの初放鳥にあわせて平成20年から生産をスタートさせた「朱鷺と暮らす郷」認証制度の普及により、江の設置や冬期湛水などの「生きものを育む農法」が農家に浸透し、取組みは着実に増加しています。そして、この制度で作られた認証米は毎年完売を続け、佐渡米全体の販売力強化につながっています。

このような、自然と人間が共生する農業システムのほか、中山間地域の里山・棚田の美しい風景や、伝統芸能の保存と継承もジラス認定において評価されました。

## 厳しい現状

佐渡の農業が抱える現実には厳しいものがあります。

その大きな問題のひとつは担い手不足です。総農家数7103戸のうち、後継者がいる農家は3165戸。農家からは「今の30〜40代が農業をやっていないのに、その子どもが農業をやるのか？」といった不安の声もあげられています。

耕作放棄地は、2005年は91,634アールでしたが、2010では106,952アールと増加しています。

## ジラスQ&A

ジラスについての疑問やキーワードなどを解説します。

**Q 「生物多様性」という言葉をよく聞きますが、どんなことですか？**

生物多様性とは、多様な生きものたちの豊かな「個性」と「つながり」のことです。

わたしたちの生活は、食べるもの、着るもの、住むところなど、自然の営みから多くの恩恵を受けていますが、日常的に意識することはあまりありません。生物多様性を理解することは、自然の恵みに感謝することです。

後世に残すべき生物多様性を保全している農業上の土地利用方式や景観を兼ね備えている証として、国連食糧農業機関（FAO）が認定するのが、ジラス（世界農業遺産）です。

**Q ジラス認定によって、農法への制限はありますか？**

農業者の農法そのものへの制限はありません。しかし、生物多様性を守ることが大きな条件です。農地を守り、耕作することが、生きものがすむ環境や美しい里山の風景を保つことにつながります。

**Q ジラスに認定されたことで、何か期待されることはありますか？**

佐渡の知名度が国内外で高まります。佐渡産農作物のブランド化や、観光資源としての活用など、佐渡の魅力が大きく向上することが期待されます。そのほか、環境学習の場として活用されることで、未来を担う子どもたちが佐渡の環境のすばらしさを知ることができ、また、都市住民や消費者との交流を推進することで、地域の



「生きものを育む農法」の田んぼ（新穂）



## 「朱鷺と暮らす郷づくり」 認証制度 取組実績

年度	面積	農家数
平成20年度	426ha	256戸
平成21年度	862ha	510戸
平成22年度	1,234ha	695戸
平成23年度	1,320ha	701戸